【モータースポーツコラム】

筆者：島村 元子

withコロナの中、取材で感じたこと

2020年シーズンから引き続き、今シーズンも新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、モータースポーツの取材活動にさまざまな規制が設けられました。

まず人数が制限され、カテゴリーによってはイベントごとに一定期間の検温とその申告を、さらにPCR検査や抗原検査などが行われるなど、つねに緊張感を持って現場の取材に臨んだのは言うまでもありません。

人との接触が不可欠なインタビューなどは、最小限に留めることが求められました。そこで、事前に電話でチームマネージャーとアポを取ってからチームピットへ。

ドライバーとは十分な距離を確保し、スマートフォンの自撮り棒を流用した自作の”キープ・ディスタンス仕様”!?　ボイスレコーダーをドライバーの口元に差し出し、コメントをもらうという苦肉の策で対応しました。

良くも悪くも距離があるせいか、慣れないうちは数名の取材だけでグッタリ。

また、マスク越しのインタビューでは思うように相手の表情を見て取ることが難しく、ときにエンジン音が響くパドックではマスクでこもった声が聞き取れないこともあり、新たな取材の悩みにもなりました。

かつてはふらりと立ち寄ったチームのピットでコーヒーを飲みつつ、思わぬ話が耳に入ってきた……、なんていう”オマケ”がついてくることも珍しくなかったのですが、”不要不急”の訪問もはばかれるようになり、チーム関係者には「サーキットに来てたの？」と驚かれることもしばしば。

取材で大事とされる”足で稼ぐ”ことが思うようにできず、歯がゆさを覚えたことも事実です。

一方で、リモート取材の活用も増えました。
公式会見に声だけ”参加”、初めて質問したときはどことなく気まずい感じを持ちましたが、今ではドライバーやチーム関係者もzoomなどオンラインツールでの取材を快く引き受けてくださるようになり、当初抱いていた心配は杞憂に終わりました。

　サーキットではいつも”マスク顔”のため、ステップアップしたばかりのドライバーとは、オンラインで初めてお互いの”素顔”を見るという笑い話のようなケースも出てきましたが、これもまた”ニューノーマル”の取材スタイルとして容認されていくのかもしれません。

とは言うものの、できることならば当人の傍らで、その表情や声の抑揚をダイレクトに感じながら話を訊きたいという思いも募りました。

そのような中、SUPER GT最終戦富士では、GT500クラス3位となったNo.37 KeePer TOM’S GR Supraのサッシャ･フェネストラズ選手が、何度も「Happy！」と目をクルクルさせて、「いい走りができた」と破顔一笑。

優勝の可能性もあった戦いでしたが、コロナ禍で待ちわびた来日がようやく叶って復帰3戦目で手にした結果に対するコメントは、悔しさよりも善戦できた喜びと手応え、そしてチームはじめ関係者への感謝の言葉で満ち溢れていました。

やはり、生の声にはリモートで感じ取れないものが宿っているとあらためて感じた瞬間でもありました。

　これは、レースをどういうスタイルで観戦するかということにも似ているように思います。

今やテレビなどのメディアを通じた観戦方法も数多く確立しており、サーキットに居ずともライブで情報収集することは可能です。

そこにコロナ禍で、各サーキットやレースプロモーターがファンのニーズに応えるコンテンツを新たに提供したり、参戦チームやドライバーが発信するSNSも拡充。

あらゆる情報公開が進むこととなり、盛りだくさんのツールを活用しながらレース状況を随時把握することに、新たな楽しみを見い出された方もおられたことでしょう。

ですが、サーキット観戦の経験があればわかるはずです。
空に抜けていくマシンの轟音、タイヤから上がるスモーク…、いわゆる五感の一部へ伝わるダイナミックさが、モータースポーツならではの魅力であるということを。

その場に集った大勢の人たちと、サーキットを包む熱気を共有する楽しみがあるということを。

　たとえば、今シーズンもSUPER GTの最終戦で大きなドラマが繰り広げられました。

この世界では、ときに想像だにしないことが現実になるとわかってはいても、タイトルを巡って明暗を分けることになる”一瞬の出来事”がいざ目の前で起こると、辺りに漂う空気はそこに居た人だけが感じ取れる、得も言われぬものとなる。そしてそれぞれの心の中に刻まれる…。

これこそが現地観戦ならではの妙趣だと思うのです。

実のところ、執筆のお話しをいただいたときにはもうコロナの話題でもないだろうと思っていたのですが、年の瀬に向けてなにやら感染力が強い変異株が新たに発見され、世界中を再び不穏な状況に引き戻そうとしています。

まだまだ予測不可能なことが多く、厳しい状況下でのイベント開催が続くかもしれません。

それでも2022年シーズンは、ぜひ現地観戦ならではの格別の魅力を少しでも多くのファンに堪能していただけたら、と思います。

そして私自身も、”現場の声”をよりたくさん取材できることを願うばかりです。

（プロフィール）

島村元子（しまむらもとこ）／1967年大阪生まれ。大学生時代に自動車関係の広告代理店でアルバイトを始め、鈴鹿サーキットでサンデーレースを取材したことがきっかけとなり執筆活動の場を広げる。その後フリーランスとなり、現在はSUPER GT、スーパーフォーミュラを中心に取材・執筆。コロナ終息後のル・マン24時間レース取材再開を心待ちにしている。